

音楽と私

船橋シニアアンサンブル 村岡悦子

新教育要領の基、西洋音楽を学ぶこと、西洋楽器に触れることが次第に求められる時代に私は育ちました。当時の合唱コンクールもその始めの一步だったかと思いますが、私は小学校六年生の時初めて合唱を経験し、歌うことの喜びやハーモニーの美しさを実感しながら音楽への興味関心が生まれるきっかけとなりました。日々の練習を重ねた音楽室の壁には、バッハ、ヘンデル、メンデルスゾーン、ベートーヴェン・・・と音楽歴史上の偉大な音楽家達が、中世ルネサンス、古典派、ロマン派と時代区分の順を追って整然と並んでいました。音楽家達のくると巻かれた髪の毛を見て「どうして長い髪の毛なのか」と不思議に思ったものです。後にカツラと分かった時は、「髪があるのにどうしてカツラなのか」といらぬ心配をしたものです。楽器戸棚の中には、西洋楽器が整然と並べられ、最上段には重々しいケースに入ったヴァイオリンが大事そうに置いてありました。初めてヴァイオリンを見た時、美しい姿に魅了され、この楽器はどんな音色なのかと強い関心を持ち、いつの日にかこの手でヴァイオリンを弾いてみたいという夢のような思いを抱いたのです。



そんな折、地方公演で子供ヴァイオリニストの鰐淵晴子さんが静岡の我が町へとやってまいりました。フリルの付いたかわいい衣装でサラサーテのチゴイネルワイゼンほか数曲が演奏され、身近で初めて聴いたヴァイオリンは華やかで研ぎ澄まされた美しい音色で大変なカルチャーショックを受けたのです。これを機会にヴァイオリンを弾いてみたいという思いは更に強く確固たるものとなっていったのです。その後ピアノを学ぶことになり、恋い焦がれたヴァイオリンを手にしたのは、五十歳後半でした。

ヴァイオリンが手元に届けられた日は、弦を指で弾いたり眺めまわしたりして大変嬉しかったのを覚えています。力が入りすぎて弦の上を弓がすべったり少しでも押さえた場所がずれると正しい音にならないので、ピンポイントで押さえることは重要なポイントでした。正しい音が出るまでには、随分と時間が掛かり、ピアノを弾くことに慣れてしまった私の指は、弦から直ぐに指を離す癖が更に上達を遅らせました。もっと若い時に開始すべきだったと後悔しきりです。

ご縁あって船橋シニアアンサンブルのお仲間に入れて頂きましたが、私でもやっていけるのだろうかという不安ときっと楽しいに違いないという楽観的な期待が入り混じったものでした。いろいろな楽器が奏でる一つ一つのハーモニーが素晴らしい曲となり、人の心を感動させることを改めて実感しているところです。指導者の脇田先生の音楽に対する情熱とユーモアのある楽しいご指導を受けながら幸福な時間となっているのは間違いありません。ヴァイオリンを正しい音で美しく奏でられるように練習あるのみですが、一年でも長くこの生活が続けられますように願っています。何十年も前に西洋音楽を目指した音楽環境が今花開き、学校も一般人も又我々シニア世代も音楽を通して、素晴らしい豊かな音楽世界を楽しめる時代であることを改めて思うのです。そしてこのような豊かな音楽の世界を味わうことのできるシニアアンサンブルを立ち上げていらっしゃる岡村斉能さんに「乾杯！」です。